

アメリカ初期裁判心理学における ミュンスターバーグとウィグモアの論争

——大衆への訴えかけと専門家との関係から——

篠 木 涼

(立命館大学衣笠総合研究機構)

本論は、1900年代後半におこった心理学者ヒューゴー・ミュンスターバーグ (Hugo Münsterberg 1863-1916) と刑法学者ジョン・ヘンリー・ウィグモア (John Henry Wigmore 1863-1943) の論争を、専門知と大衆への訴えかけに焦点をあて検討する。この論争は、アメリカ裁判心理学 forensic psychology 史における心理学と法学の対立を象徴する出来事として繰り返し記述されてきた。二つの異なった特性をもつ専門知の間の対立の問題を提起するものとして議論されてきた。また、ミュンスターバーグは法律の専門家への批判を大衆に向けて訴えかけたため、そのことが対立を惹起した一因として言及された。これまでの研究は、論争を引き起こすに至った専門知それぞれがもつ性質の違いと、その違いから引き起こされる問題の現代性を明らかにしてきたが、大衆への訴えかけとの論争の全体との関係については十分に検討されていない。本論は、ミュンスターバーグによる裁判心理学言説の公表からウィグモアとの論争以後にかけての二人の文脈を検討することでこれを明らかにしようと試みる。検討の結果明らかになるのは、専門領域間の協働の可能性と心理学の大衆化の衝突の関係である。

キーワード：ヒューゴー・ミュンスターバーグ，ジョン・ヘンリー・ウィグモア，裁判心理学，
専門家，大衆化

立命館人間科学研究, No.33, 15-27, 2016.

はじめに

本論は、1900年代後半におこった心理学者ヒューゴー・ミュンスターバーグ (Hugo Münsterberg 1863-1916) と刑法学者ジョン・ヘンリー・ウィグモア (John Henry Wigmore 1863-1943) の論争を、専門知と大衆への訴えかけに焦点をあて検討する。この論争は、アメリカ裁判心理学 forensic psychology 史における心理学と法学の対立を象徴する出来事として繰り返し記述されてきた。それは二つの異なった特

性をもつ専門知の間の対立の問題を提起するものとして議論されてきた。また、ミュンスターバーグは法律の専門家への批判を大衆に向けて訴えかけたため、そのことが対立を惹起した一因として言及された。これまでの研究は、論争を引き起こすに至った専門知それぞれがもつ性質の違いと、その違いから引き起こされる問題の現代性を明らかにしてきたが、大衆への訴えかけとの論争の全体との関係については十分に検討されていない。

本論の背景にあるのは、心理学と社会の関係に焦点を当てる心理学史研究である。心理学と

社会との関係として、応用心理学に焦点を当てる傾向 (Jansz & Drunen 2004) と、心理学の大衆化 popularization に焦点を当てる傾向がある (Burnham 1987; Ward 2002)。心理学の大衆化とは、Ward (2002: 140) によれば、「心理学者たちが自分たちの学問領域を大衆によく知らせようという試み」である。当然、それは実験心理学や理論心理学とともに、応用心理学についても行われてきたものであり、応用心理学の歴史への関心と心理学の大衆化の歴史への関心の両者は重なってくる。ただし、特に、心理学の大衆化について、Ward (2002: 140) は次のように留意が必要なことを指摘している。すなわち、専門的な知識の大衆化という場合、「内部で生み出される専門的な知識と「その外部」のどこかで消費される大衆的な知識との間に明確な境界線が想定」されるが、しばしば「内部と外部の厳格な境界は 20 世紀の心理学には上手く当てはまらないのである」。本論は、このような点を踏まえた上で、心理学と法という二つの専門領域が知識の普及に関わって衝突したミュンスターバーグとウィグモアの論争を検討し、心理学と社会との関係、応用心理学と大衆化をめぐる研究動向に貢献することを目指している。

ミュンスターバーグは、ダンツィヒに生まれ、ドイツのヴィルヘルム・ヴント Wilhelm Wundt の下で学び、1892 年代初頭ウィリアム・ジェイムズ William James にハーバード大学の心理学実験室に招かれ、1895 年から 2 年間ドイツのフライブルグ大学に戻るものの、亡くなるまで主としてアメリカで研究を行った心理学者である (Hale 1980)。ウィグモアは、サンフランシスコに生まれ、1889 年から 1892 年まで日本に滞在し慶応義塾大学の最初の法学教授を務め、帰国後はノースウェスタン大学教授となり 1901 年からは法学部長にあった刑法学者である (慶応義塾史事典編集委員会 2008)。ミュンスターバーグとウィグモアの論争とは、ミュンスターバー

グが 1907 年から発表し始めた裁判心理学の論考が注目を浴びことに始まり、法の専門家からの批判が巻き起こり、ウィグモアがミュンスターバーグを虚構の裁判で批判する奇妙な形式の論文を発表したことで終わるといえるものである。多くの記述において、この論文によって、ウィグモアがミュンスターバーグに勝利したとされる。

I これまでの研究

この論争は、アメリカ裁判心理学の歴史において、心理学と法の対立を象徴する最初期の出来事として繰り返し言及され、これに焦点を当てた研究もなされてきた。17 世紀の科学革命から、20 世紀初頭のミュンスターバーグまでの科学と法との関係を辿るものとして Kargon (1986) がある。論争が現在の法にかかわる心理学研究にとって先駆的であり、現在まで引き継がれる法と心理学の関係の問題が見いだせると指摘する Magner (1991) がある。証言についての科学の導入をめぐる研究のなかで、法と心理学の関係性の原型としてミュンスターバーグとウィグモアの論争を位置づける Doyle (2005) がある。

Kargon (1986) の議論は以下のように要約できる。論争は、科学と法の関係の歴史のなかで、19 世紀後半成立した新興の専門領域である心理学に、科学としての地位を社会的に確立させようとしたミュンスターバーグの意図とその失敗と考えられる。17 世紀の科学革命の時代には、新たな科学の意義を訴える科学者たちは、司法との類似を持ちだすことで実験の概念とその正当性を主張していた。18 世紀啓蒙主義の時期になると、科学と司法との関係は逆転し、科学が司法に認識論的な権威として正当性を付与するに至る。それが、19 世紀になり産業革命によって技術が複雑になると、自然科学と工学から証拠を取り入れることが避けがたくなり、専門家

による証言が必要となった。その結果、19世紀中頃までには化学者などの実験科学者の証言の有効性は疑われなくなっていた。それに比して、19世紀後半新興の学問の専門家として登場してきた心理学者は、新たに科学としての地位を積極的に主張する必要があった。このような科学と法の関係の歴史のなかで、ミュンスターバーグとウィグモアの論争は、ミュンスターバーグが、新興の専門家としての心理学者の位置を、法律家に認めさせようと急いだ結果であるとされる。

Magner (1991) の議論は以下のように要約できる。ミュンスターバーグは目撃証言の不確実性を指摘するが、法制度にとって目撃証言は不可欠であり、目撃証言一般がどれほど不確実であったとしても、完全に排することは考えられない。心理学が明らかにするのが統計的な傾向であるのに対して、法が求めるのは一回性の出来事の状態であり、それぞれが追求する事実の性質は異なっている。このような法と心理学の関係にとっての原理的な困難が、ミュンスターバーグとウィグモアの論争において現れてきている。目撃証言の問題は、一般的な法則性の定立に関わる科学としての心理学と、個別的な事実確定に関わる刑事司法との間の専門知の違いを象徴するものとして捉えられる。

Doyle (2005) の議論は以下のように要約できる。Magner (1991) と同様、論争は後の科学や心理学と法との関係を理解する上での原型を与えるものと考えられるが、Magner (1991) が論争の勝ち負けとしては攻撃的で誇張を含むミュンスターバーグの負けであると判定するのは対照的に、そもそも勝ち負けが問題となる状況自体、ウィグモア論文の虚構の裁判形式がもつ効果に起因するところがあると述べる。「例えば、ウィグモアは、自身を原告弁護士として配することで、たまたま同意見である場合でさえ、ミュンスターバーグの長所（たとえば、目撃証言に

おいて誤謬が生じるという見解）を無視する。裁判戦略の論理が、ミュンスターバーグの弱点に、ウィグモアが攻撃を集中するべく影響している。たとえば、心理学に問題を解決するための道具立てがすでに備わっているという主張にである。」(Doyle 2005: 28)。

これらの先行研究は、論争という出来事を構成する要素として、法と心理学の関係における原理的問題の外部にある文脈の重要性に言及している。いずれも、法と心理学の間で重視する知識の性質が異なっているという問題に加えて、複数の専門的学問領域の関係性、ミュンスターバーグとウィグモアそれぞれの議論の仕方が持つ問題点を指摘している。さらに、ミュンスターバーグによる法の専門家への攻撃を伴った大衆への訴えかけがウィグモアら法の専門家からの反発を招き論争の契機となったと言及している¹⁾。にもかかわらず、大衆への訴えかけと論争全体の関係に焦点を当てた検討は十分になされていないのである。

II ミュンスターバーグの裁判心理学における法律専門家への批判

ミュンスターバーグとウィグモアの論争は、ミュンスターバーグが裁判心理学の議論で行った法律専門家への批判に対して、法の側からの批判的応答があり、それにウィグモアの論文が決着をつけたという数年に渡る出来事の連なりである。ミュンスターバーグが裁判心理学的研究に着手したのは、1906年にシカゴで起きた殺人事件の容疑者の証言をめぐる意見を求められてからである (Münsterberg 1922)。

その後、ミュンスターバーグは、1907年初め頃から幾つかの雑誌において記事を断続的に発

1) 本論も含めミュンスターバーグについての研究は、伝記的な情報については Hale (1980) の記述を多く参照している。

表し始め、それを著書『証言台で』(Münsterberg 1908)にまとめあげることになる(Münsterberg M. 1922: 368)。文章の多くが発表されたのは、心理学の学会誌や紀要などではなく、『マクルア』という名前の一般向け雑誌であった。大衆ジャーナリズムは、19世紀末以降、とりわけ殺人を中心に、犯罪に関わる現象に強く惹きつけられており(Allerfeledt 2011: 16-17)、「イエロージャーナリズム」と呼ばれる、センセーショナルリズムと結び付けられることの多い動向が現れてきていた。『マクルア』は、その流れを汲む、「自治体の墮落や企業の貪欲さと不品行を暴露」(Campbell 2001: 10)を主とするようなスキャンダル雑誌であった。

『マクルア』のなかで、ミュンスターバーグの記事は、次のようなかたちで掲載されていた。1907年、元州知事のフランク・ストイネンバーグ Frank Steunenberg を含む18人を爆殺した殺人犯ハリー・オーチャード Harry Orchard が、世間を騒がせていた。彼は、当初、自分の罪を否定していたがやがて罪を認め、さらに自分の犯罪は、世界産業労働組合の主導者だったウィリアム・ダッドリー・ヘイウッド William Dudley Haywood ら四人によって命令されたものであると自白する。この自白を真実とみなしていいかどうかが問題となった。この自白の真偽について、ミュンスターバーグは、『マクルア』の依頼で、彼の取材を行い、証言を聞き、幾つかの心理テストを行っていた。ミュンスターバーグの論文の多くは、このオーチャード自身の告白録とともに掲載されていた。

オーチャードの告白録が掲載されるのは、『マクルア』の1907年7月号からである。告白録は、スキャンダル暴きのジャーナリストであり作家でもあったジョージ・キッピ・ターナー George Kibbe Turner によって紹介がなされ(Turner 1907a, b, c)、同年11月号まで連載された。告白録は、殺人の準備段階から逮捕に至るまでを詳

細に記述したもので、関係した人物の顔写真や実際に事件で用いたのと同じ爆弾の写真がつけられていた(Orchard 1907a, b, c, d, e)。この連載が進行するなか、ミュンスターバーグの記事が、1907年9月号から断続的に掲載され始める(Münsterberg 1907a, b, 1908a, b)。ミュンスターバーグの記事は、オーチャード事件についての見解を示そうとするものではないが、とりわけ目撃証言の不確実性に焦点を当てるものであり、その上で広く裁判心理学の紹介を行おうとするものだった。ミュンスターバーグの記事は、発表されるメディアにおいても、主題においても、時期においても非常に注目を集める状況において掲載されたのである。そしてここで、ミュンスターバーグは、裁判心理学を受容することになるはずの法の専門家たちが無理解であるとして非難を向けたのである。次のように述べている。

実験心理学が、とうとうその(後の行で記されるような、知覚だけではなく、暗示や連想などによって心の変化が生じることの・・・引用者注)原因を明らかにした。犯罪と処罰が問題であり、目撃者の心の分析によって事件の全側面が変化してしまうかもしれない場合、この科学の全体を無視し常識に基づく素朴な心理学に満足してしまうのが正しいとは、まったく思えない。それが十分なのは、日常生活で、暗示などのような心の変化に悩まされているような場合である。しかし、少なくとも法廷は真理に近づいていくべきであるし、その道を示すべきである。(Münsterberg 1907a: 536)

また、歴史的に捜査中に行われてきた厳しい尋問を批判し、連想法の具体的な手続きを説明し、近年の動向としてジークムント・フロイト Sigmund Freud らウィーン学派によるヒステリー研究を紹介するなかでは、「こういった状況において、実験心理学が近年発展させてきた連

想による測定法についてこれまで法律家も素人も同じくまったく注意を払ってこなかったのは、驚くべきことであるし、正当化されるものではない」と書いている（Münsterberg 1907b: 615）。

Ⅲ ミュンスターバーグによる大衆への訴えかけに対する批判

このような主張を行ったことで、ミュンスターバーグは、法の専門家から反発を招き批判された。その代表は、1907年10月法学雑誌『ローノート』Law Notes誌においてチャールズ・C・ムーア Charles C. Mooreが、「イエローサイコロジー」と題して発表した批判である（Moore 1907）。ムーアによれば、ミュンスターバーグはアメリカの法制度について無知であり、彼が紹介したような現状の心理学が提示している知見は法の専門家たちが、すでに自身の経験と常識において、把握していることである。このような批判のなかでムーアは、論文中においてミュンスターバーグを、繰り返し『マクルア』の記事の作者」と呼び揶揄する。ミュンスターバーグの心理学による法の専門家に対する批判は、イエロージャーナリズム的なスキャンダル雑誌の記事にすぎないというのである²⁾。対して、翌11月同誌においてミュンスターバーグは、アメリカの法制度について無知であるとの批判についてはこれを認めながらも、自分が行った指摘はすでに法の専門家が経験によって知っている範囲のものだというムーアの反論こそ、自らの論で批判した心理学という科学を受け入れない法の側の態度そのものと批判した。さらに、一般誌に書くということがどのような意図によるのかを、次のように述べている。

要するに、私は世論に法と心理学の近い関係について興味を持たせることに着手したのである。新聞紙での活発な議論は、より広い大衆に関心を持たせることに私が完全に成功したことを示している。いかなる改革も広範な大衆の関心を通してのみ起こりうると私はよく分かっている。提案がもし法律専門誌に合った専門的な物言いに限られていけば、このような関心を掻き立てることはできないだろう。（Münsterberg 1907-1908: 146）

ミュンスターバーグは、呼びかけるべき宛先として、まず法律専門家ではなく大衆を考えている。法と心理学の間に新しい関係を築くことを目標に考えていたにせよ、それを二つの領域の専門家間の直接の対話よりもむしろ、大衆に議論への関心をもたせ、支持を得ることで、状況を変化させることを重視している。1908年3月にこれらの論文をまとめたかたちで刊行した『証言台で』においても、ミュンスターバーグは、法律専門家への攻撃と大衆への訴えかけの重視をめぐり同様の主張を繰り返すことになる（Münsterberg 1908: 9-11）。

Ⅳ ウィグモアのミュンスターバーグへの書簡における大衆と専門家の位置

このようなミュンスターバーグに対して、ウィグモアは、『証言台で』刊行以前から法の専門家に役立つ心理学に関する情報提供を求めており、刊行以後はミュンスターバーグが大衆に向けて法律家への非難を行ったことを批判していた。具体的には、1907年7月の時点において、ミュンスターバーグに直接書簡で連絡をとっている（Wigmore 1907）。まずミュンスターバーグがこれまでに発表した論文とこれから出る『証言台で』の紹介を、『コモン・ロー裁判における証拠体系論への補遺』（Wigmore 1908a）に掲載することを報告し、ミュンスターバーグの諸論文に

2) 実際には、ミュンスターバーグだけが、『マクルア』の記事の作者」であったわけではない。James (1908, 1910) のように、ウィリアム・ジェイムズも同誌に寄稿していた。

注や参考文献が付けられていないことに注文をつけ、次のように述べている。

法律家たちこそ、あなたの新しい原理で教育しようとしてみなければならぬものたちではないでしょうか。そのために、あなたが参照した文献のひとつを『イリノイ・ロー・レビュー』Illinois Law Review に再録させていただきませんか。

(Wigmore 1907)

ウィグモアは、ミュンスターバーグの論文の宛先が一般大衆であることを見て取っており、むしろ法律の専門家に対して情報提供することを求めていたのである。しかし、このようなウィグモアからの依頼をミュンスターバーグが聞き入れることはなかったようである。すでに述べたように、『証言台で』においても、ミュンスターバーグは法律の専門家への非難を繰り返している。ウィグモアは、『証言台で』が刊行された後の1908年11月8日付で、ミュンスターバーグに宣戦布告ととれる書簡を送っている。

『証言台で』を読み、大いに関心をもち、得るところがありました。しかし、白状せざるをえませんが、あなたがたの方法を受け入れていないことをもって、法律の専門家は怠慢だという主張をあなたが立証したとは私は考えていません。それゆえ、一、二月したら、私たちにあなたが行った非難に対して大衆の面前で少しつこみ poke を入れさせてもらうつもりです。あなたが大衆の面前でわれわれの職業を物笑いにし、からかったことを考えれば、そのことについてよもや私があなたから恨みをかうなんてこともないでしょう

(Wigmore 1908b)

法律の専門家を批判するとともに非専門家である人々に向けて心理学の紹介を行うというミュンスターバーグが採用した戦略自体が、ウィ

グモアによる批判の争点となっていたことを読み取ることができる。ウィグモアがこの書簡で予告していたのが、論争の中心となるミュンスターバーグへの批判論文である。

V ウィグモアによるミュンスターバーグ批判論文

1909年、『イリノイ・ロー・レビュー』に、「ミュンスターバーグ教授と証言の心理学」(Wigmore 1909)と題された論文が掲載される。この論文は、ウィグモアの見解を代弁する虚構の登場人物である原告弁護士タイロ Tyro による被告ミュンスターバーグに対する尋問から構成される。冒頭は、まず、この論文が虚構の裁判という形式をとるものだということが、明らかになるように記述されている。次のように始まる。

1909年4月1日(つまり、エイプリルフール)に、(イリアナ州) ウィンディヴィルにて興味深い裁判が行われた。その完全な報告が今ではじめて刊行される。訴えは名誉毀損である。原告はエドワード・コークストーンその他(最高裁判所の正式に認められたメンバー)である。被告はヒューゴー・ミュンスターバーグ、湾岸州ケンブリッジの古く名誉ある大学の人文科学及び自然科学学部の心理学教授である。

訴訟は、1908年4月1日にヴント郡高等裁判所で申し立てられたもので、通例の言い回しで、次のように述べる原告の請求に基づいたものである。原告たちは名声も信用もある人物である。被告は、上記原告たちに関し、法廷の成員としての能力について不正確で、間違った、真実ではない主張を、1908年3月刊行の『証言台で』と題された書籍において(この前に1907年2月以降『タイム』誌に、上記書籍に再録される雑誌論文が所収されている)、イリアナ州及び国内中において印刷、出版、流通させた、と。

(Wigmore 1909: 399)

裁判所の名前が心理学者のヴィルヘルム・ヴントからとられていること、裁判所の所在地がイリアナ州という実在しない州であることなど、ミュンスターバーグ以外の名前は、存在しないが現実とのなんらかの関連を想起させる名前が当てられている。当然、ミュンスターバーグが行ってきた法律家への非難は専門家に対する名誉毀損であるとする訴訟も存在しない。しかし、この論文において、裁判の舞台設定、裁判のなかで行われるミュンスターバーグによる証言などは虚構でありながら、同時に、タイロ、すなわちウィグモアが参照するミュンスターバーグの主張や心理学と法に関する文献は、現実のものである。つまり、虚構の裁判のなかで検討されることがら自体は、現実のものである。ミュンスターバーグが、同時代の弁護士や検事、判事ら法の専門家たちが頑迷であるがゆえに心理学を受け入れていないと主張していたのに対して、ウィグモアは、すでに書簡において求めていたように、専門家への情報の提供をミュンスターバーグが行うことなく、専門家を非難していたことを批判するのである。そして、彼の法の専門家への批判が妥当となるような条件が実際に存在していたのかどうかを検討する。具体的には、次のような問いである。

1. 第一に、その時点で、ドイツやフランス、アメリカにおいて、証言の確実性を測定し有罪の診断を下すために、裁判で実際に利用できその価値もある実験心理学による正確な手法が存在していたと法の専門家に信じる気にさせるような、心理学者によって公表された情報は、印刷され利用可能な状態で存在していたのか。そして、これにつづき、

a. 英語圏での刊行物にそのような情報は存在したのか。

b. ヨーロッパ諸言語圏での刊行物にそのような情報は存在したのか。

c. もし刊行された情報があったとして、その発表は、アメリカの裁判で直ちに使用するに値するほど、大陸の心理学者と法律家に受け入れられているようなものだったのだろうか。

2. 第二に、これらの手法は事実としてその内在的な利点において、今まで使用されている手法に優越するほど、今実際に使用して裁判で依拠することができるようなものであるか。

(Wigmore 1909: 404)

問いを立てたうえで、ウィグモアは、論文末に「証言をめぐる実験心理学的研究についての、1907年までの論文と著作のリスト」(Wigmore 1909: 435-445)として、27の定期刊行物と127の文献を列挙し、それを踏まえながら、回答を与えていく。以下のような回答である。ミュンスターバーグが法律家への批判を行った時点において、法律家たちに周知され使用に至るようなかたちで、英語で読める文献はなかった。さらに実際ミュンスターバーグが名前を挙げた心理学者たちの業績はここ数年以内のものであり、それらの紹介はなされていなかった。ミュンスターバーグ自身の文章においてそれらの業績をどうすれば入手できるのかは示されていなかった。そして、当のヨーロッパの先駆的な心理学者たち自身もそれらの業績は作業中のものであり直ちに法実務へと応用できるものではないと認めており、また現状において心理学者が指摘している知見は法の専門家たちが経験則から導き出している認識と異ならない。

これらのウィグモアの批判に対して、ミュンスターバーグは応答を行うことはなかった。そのため、ウィグモアの批判論文の発表が、公の場で論争と認められる出来事の終結と考えられている。以後、心理学と法の境界領域に対して「この論争は大いに関心を引き」(Spencer 1929:

158), 強い衝撃を与えた。1930年代後半の時点で、「ウィグモア教授を筆頭にした法の専門家たちによるその応答は圧倒的であり, 結果少なくとも丸々25年の間, 同じような考えを抱く心理学者はもう一人もいなかった」(Cairns 1937: 101)と述べる者さえいた。

VI 論争以後のウィグモアと裁判心理学の紹介

しかし, この論争によって, 心理学者と法の専門家との学問的関係がまったく失われてしまったわけではない。ウィグモアは, 論争以後も, 自身が編纂する論集にミュンスターバーグへの批判論文とともに、『証言台で』の一節を採録するために, ミュンスターバーグと書簡を交わしている。1913年, ウィグモアは, 心理学を含む多くの文献を集めた論集『論理学, 心理学, 一般的経験によって与えられるものとしての裁判証拠の原理と裁判審理描写』(Wigmore 1913c) (以下、『裁判証拠の原理』と略)を刊行する。この論集のために, ウィグモアは, 自身の「ミュンスターバーグ教授と証言の心理学」とともに, ミュンスターバーグの『証言台で』の一節を掲載しようと, 直接ミュンスターバーグから許可を得ているのである。そこには次のように記されている。

これは法律の専門家が目を開き世間を見ているしるしであると, あなたが感謝してくれるのではないかと期待しています。きっと, これら短い引用を使うことで, この本は, さもなければ耳にすることさえなかったかもしれない若い法律家たちへと届くでしょう。

(Wigmore 1912)

1913年1月3日付の書簡では, 掲載をミュンスターバーグが認めたことに対してウィグモアが感謝の言葉を記している。

本の一節を使うことに親切にも同意していただき心から感謝します。私がこの機会を利用して三年前の嫌みたらしい論争を続けようとしているのではないかとご心配される必要はありません。私がこの本で切望しているのは, あなたの見解が法科の学生に十分説明されることです。それゆえにこそあなたの本からの引用を望んでいるのです。私はただ問題の別の側面に幾つか真面目な見解を付け加えるだけです。

(Wigmore 1913a)

これらの書簡には, ウィグモアが, 法律専門家と法律を専攻する学生に対して心理学を紹介しようという意図が現れている。さらに, 1913年9月25日付の書簡では, 次のように述べている。

いつか「証言の信頼できなさに関わるいくつかの最新事例」と題された章に注意を向けてください。そこに法律家によって大いに用いられ信頼されている一方で, 心理学者によってはまだ扱われていない方法があることを分かっていたでしょう。私は, 自分の本が心理学者が自分の能力を試す素材になるだろうという希望もっています。確固とした心理学的基礎に基づいてこれらの方法の立証上の身分を解明していただければ, 大なる勝利となるでしょうし, また非常に有益でしょう。

(Wigmore 1913b)

この書簡が示しているのは、『裁判証拠の原理』(Wigmore 1913c)が, 法律専門家に対する心理学の紹介であるだけでなく, 心理学者にとって課題を与えるものだという点である。ミュンスターバーグがその主張の宛先として専門家ではない一般の人々を想定していたのに対して, ウィグモアは, 法律についてであれ, 心理学についてであれ, 専門家を宛先として考えている。

この手紙のなかで、ウィグモアは、『裁判証拠の原理』に自身の「ミュンスターバーグ教授と証言の心理学」Wigmore (1909) から抜粋するにあたり、「もちろん、元の論文にあるふざけていたり論争的であったりする内容はすべて削除しました」(Wigmore 1913b) と述べている。事実その通り、『裁判証拠の原理』では、題名も元の「ミュンスターバーグ教授と証言の心理学」から「証言の心理学」へと変更され、文章も修正されたかたちで掲載されているのである。1909年の批判論文から1913年の論集における転載の過程で、論争の痕跡は消し去られた。

Ⅶ 大衆への訴えかけと専門家と知識の普及に対する態度

ミュンスターバーグとウィグモアの論争がどのように始まり、終わってからどうなったのかを通して検討した。ここには、心理学と法学という二つの専門領域における知識のあり方の違いにくわえて、専門知を伝え普及しようとする際の宛先、専門家か大衆かが一貫して問われていたことをみてとることができる。ミュンスターバーグがまず大衆へと訴えかけるのを重視するのに対し、ウィグモアは専門家が必要な情報に触れることのできる環境の整備を重視する。このような知識の普及についての態度の違いは、ミュンスターバーグとウィグモアのその後の活動にも現れている。

ミュンスターバーグは、論争以後、裁判心理学の研究を継続するのではなく、産業や教育、心理療法などの多様な分野への応用心理学の研究へと範囲を広げていく。ウィグモアの論集が刊行されたのと同じ1913年、ミュンスターバーグは『心理療法』を発表し、次のように述べる。「心理療法をめぐるこの本は、幅広い大衆に向けて近代心理学の実践への応用を論ずるために私が執筆している一連の書物に属している。『証言台で』

と題した最初の書物は、科学的心理学と犯罪や法廷との関係を研究するものだった」(Münsterberg 1913: vii)。「一連の書物」には、1914年における『一般及び応用心理学』(Münsterberg 1914)から、最晩年の1916年の『映画劇—心理学的研究』(Münsterberg 1916)に至るまでの心理学的著作が含まれるだろう。

他方、ウィグモアは、心理学的研究を含めたヨーロッパの犯罪学の導入を積極的に行うことになる。心理学など諸学に対するウィグモアの関心は、ミュンスターバーグとの論争以前の1905年にノースウェスタン大学で行っていた「証言と評決の実験」にさかのぼるとされるが(Magner 1991: 131)、論争以後、その動きはより本格的なものとなるようなのである。ウィグモアは、1909年シカゴで開催された刑法・犯罪学会議において創設が可決されたアメリカ刑法・犯罪学研究所の初代所長となる。1910年、この研究所は、後のアメリカの刑法と犯罪学の展開の中心となる『アメリカ刑法・犯罪学研究所雑誌』*Journal of the American Institute of Criminal Law and Criminology* を刊行するが、その編集主任には、心理学者であるロバート・H・ゴート Robert H. Gault が選出されている (Roalfe 1997: 61)³⁾。さらに1911年から、研究所は、ヨーロッパの犯罪学関連の著作を翻訳する『現代犯罪科学叢書』*The Modern Criminal Science Series* を開始している (Devroye 2010)。この叢書は、チェーザレ・ロンブローゾ Cesare Lombroso, エンリコ・フェリ Enrico Ferri, ガブリエル・タルド Gabriel de Tarde, ラファエル・ガラファロ Raffaele Garofalo などとともに、ミュンスターバーグを批判する際にウィグモアが主に依拠したハンス・グロース Hans Groß の著作を含んでおり、論争で指摘された、アメリカで読める英

3) この雑誌の名称は、時期によって変化している。その詳細は、Mueller (1969 斉藤・村井訳 1991, 104-105) の訳注1が詳しい。

語文献の不足を補うものとなったといえる。ミュンスターバーグとの論争は、このようなアメリカへの犯罪学の導入に至る契機としても位置づけることができるかもしれない。

ミュンスターバーグとウィグモアの論争は、両者の大衆への訴えかけと専門性についての相反する態度を最初から最後まで重要な要素として含んでいた。ミュンスターバーグの裁判心理学が法律家との間で葛藤を引き起こし、論争となった要因のひとつには、ミュンスターバーグが、従来、法の専門家が扱ってきた領域に、心理学の知識を応用できると主張する際の第一の宛先として、法の専門家ではなく大衆を選び、法の専門家を非難したこと、そしてそれを批判されても態度を変えなかったということがある。二つの専門領域の間で、一方がその知識を他方に伝達しようとする場合、それぞれの担い手が知識の普及を、どこを宛先に、どのような優先順位で行うのが問題になったのである。その後は、ミュンスターバーグは、他の学問領域に心理学の応用を行っていく際、他の領域の専門家に対して、裁判心理学において行ったような非難を浴びせることはなくなっていく。

心理学者と法学者の関係においても、対立するのではなく協力するということはありえた。この点で、ミュンスターバーグとウィグモアとの論争に対照的な事例が存在する。たとえば、若林・佐藤(2012)が明らかにしたように、日本においては、同じく20世紀初頭の同時期に心理学者の寺田精一と刑法学者の牧野英一との協働が存在している。この場合、寺田が学んだ心理学者元良勇次郎の紹介で直接牧野に出会い示唆をうけるかたちで協働が実現した。牧野は、ドイツの刑法学者フランツ・フォン・リストの下に留学し、リストの刑法学を日本に紹介していた。そして、これ以前に、リストは、1901年にミュンスターバーグも参照していた心理学者ウィリアム・シュテルンとともに実験を行って

いた。心理学と法学者との協働は、日本やドイツにおいてその分野の主要な研究者によって行われており、アメリカでも論争後のウィグモアによって行われていた。このような協働自体が可能であり実際に同時代に実現していたなかで、専門領域間の協働の可能性に、心理学の大衆化が衝突した。それが、ミュンスターバーグとウィグモアの論争なのである⁴⁾。

引用文献

- Allerfeleedt, K. (2011) *Crime and the Rise of Modern America: a History from 1865-1941*. New York: Routledge.
- Burnham, J. C. (1987) *How Superstition Won and Science Lost: Popularizing Science and Health in the United States*. New Brunswick: Rutgers University Press.
- Behrens, P. J. (2009) Psychology takes to the airways: American radio psychology between the wars, 1926-1939. *The American Sociologist*, 40 (3), 214-227.
- Cairns, H. (1937) Book review: law and the lawyers. *Maryland Law Review*, 1, 101-104.
- Campbell, W. J. (2001) *Yellow Journalism: Puncturing the Myths, Defining the Legacies*. Westport: Praeger.
- Devroye, J. (2010) The rise and fall of the American Institute of Criminal Law and Criminology. *The Journal of Criminal Law and Criminology*, 100 (1), 7-32.
- Doyle, J. M. (2005) *True Witness: Cops, Courts, Science, and the Battle Against Misidentification*. New York: Palgrave Macmillan.
- Hale, Jr., M. (1980) *Human Science and Social Order: Hugo Münsterberg and the Origins of Applied Psychology*. Philadelphia: Temple University Press.
- James, W. (1908) The social value of the college-bred. *McClure's*, 30 (4), 419-422.
- James, W. (1910) The moral equivalent of war. *McClure's*, 35 (6), 463-468.

4) 本研究はJSPS 科研費 15K16676 の助成を受けたものです。

- Jansz, J. and Drunen, P. v. eds. (2004) *A Social History of Psychology*. Marden: Blackwell.
- Kargon, R. (1986) Expert testimony in historical perspective. *Law and Human Behavior*, 10, 15-27.
- Magner, E. S. (1991) Wigmore confronts Münsterberg: present relevance of a classic debate. *Sydney Law Review*, 13, 121-137.
- Moore, C. C. (1907) Yellow psychology. *Law Notes*, 11 Oct. = (1908). *American Law Review*, 42, 437-445.
- Mueller, G. O. W. (1969) *Crime, Law and the Scholars: A History of Scholarship in American Criminal Law*. Portsmouth: Heinemann Educational. 齊藤豊治・村井敏邦（訳）（1991）アメリカ刑法学史—犯罪、法および学者たち。成文堂。
- Münsterberg, H. (1907a) Nothing but the truth. *McClure's*, 29 (5), 532-536.
- Münsterberg, H. (1907b) The third degree. *McClure's*, 29 (6), 614-622.
- Münsterberg, H. (1907c) Yellow psychology: Dr. Münsterberg replies Mr. Moore. *Law Notes*, 11 Nov., 145-146.
- Münsterberg, H. (1908a) Hypnotism and crime. *McClure's*, 30 (3), 317-322.
- Münsterberg, H. (1908b) The preention of crime. *McClure's*, 30 (6), 750-756.
- Münsterberg, H. (1908c) *On the Witness Stand: Essays on Psychology and Crime*. New York: The McClure company.
- Münsterberg, H. (1913) *Psychotherapy*. New York: Maffat, Yard and Company.
- Münsterberg, H. (1914) *Psychology, General and Applied*. New York: D.Appleton and Company.
- Münsterberg, H. (1916) *The Photoplay: A Psychological Study*. New York: D.Appleton and Company.
- Münsterberg, M. (1922) *Hugo Münsterberg: his Life and Work*. New York: D. Appleton and Company.
- Orchard, H. (1907a) The confession and autobiography of Harry Orchard. *McClure's*, 29 (3), 296-306.
- Orchard, H. (1907b) The confession and autobiography of Harry Orchard. *McClure's*, 29 (4), 367-379.
- Orchard, H. (1907c) The confession and autobiography of Harry Orchard. *McClure's*, 29 (5), 507-523.
- Orchard, H. (1907d) The confession and autobiography of Harry Orchard. *McClure's*, 29 (6), 658-672.
- Orchard, H. (1907e) The confession and autobiography of Harry Orchard. *McClure's*, 30 (1), 113-129.
- Roalfe, W. R. (1977) *John Henry Wigmore: Scholar and Reformer*. Evanston: Northwestern University Press.
- Spencer, C. E. (1929) Methods of detecting guilt: word association, reaction-time method. *Oregon Law Review*, 8, 158-166.
- Turner, G. K. (1907a) Introductory note to the confession and autobiography of Harry Orchard. *McClure's*, 29 (3), 295-296.
- Turner, G. K. (1907b) Introductory note to the confession and autobiography of Harry Orchard. *McClure's*, 29 (4), 367.
- Turner, G. K. (1907c) The actors and victims in the tragedies. *McClure's*, 29 (5), 524-529.
- Ward, S. C. (2002) *Modernizing the Mind: Psychological Knowledge and the Remaking of Society*. Westport: Praeger.
- Wigmore, J. H. (1907) Personal communication to Hugo Munsterberg, July 28. *Hugo Munsterberg Papers, Ms. Acc. 2244*. Department of Rare Books and Mss., Boston Public Library.
- Wigmore, J. H. (1908a) *A Supplement to A Treatise on the System of Evidence in Trials at Common Law: Containing the Statutes and Judicial Decisions, 1904-1907*. Toronto: Canada Law Book.
- Wigmore, J. H. (1908b) Personal communication to Hugo Munsterberg, Nov. 8. *Hugo Munsterberg Papers, Ms. Acc. 2244*. Department of Rare Books and Mss., Boston Public Library.
- Wigmore, J. H. (1909) Professor Muensterberg and the Psychology of Testimony. *Illinois Law Review*, 3, 399-444.
- Wigmore, J. H. (1910) Personal communication to Hugo Munsterberg, Dec. 2. *Hugo Munsterberg Papers, Ms. Acc. 2244*. Department of Rare Books and Mss., Boston Public Library.
- Wigmore, J. H. (1912) Personal communication to Hugo Munsterberg, Dec. 17. *Hugo Munsterberg Papers, Ms. Acc. 2244*. Department of Rare Books and Mss., Boston Public Library.
- Wigmore, J. H. (1913a) Personal communication to

- Hugo Munsterberg, Jan. 3. *Hugo Munsterberg Papers, Ms. Acc. 2244*. Department of Rare Books and Mss., Boston Public Library.
- Wigmore, J. H. (1913b) Personal communication to Hugo Munsterberg, Sep. 25. *Hugo Munsterberg Papers, Ms. Acc. 2244*. Department of Rare Books and Mss., Boston Public Library
- Wigmore, J. H. (ed.) (1913c) *The Principles of Judicial Proof as Given by Logic, Psychology, and General Experience and Illustrated Judicial Trials*. Boston: Little, Brown, and Company.
- 慶応義塾史事典編集委員会 (2008) 慶応義塾史事典—慶応義塾 150 年史資料集 別巻 1. 慶応義塾.
- 菅原郁夫・サトウタツヤ・黒沢香編 (2005) 法と心理学のフロンティア 〈1 巻〉 理論・制度編. 北大路書房.
- 若林宏輔・佐藤達哉 (2012) 寺田精一の実験研究から見る大正期日本の記憶研究と供述心理学の接点. 心理学研究 83 (3), 174-181.

(受稿日：2015.6.1)

(受理日 [査読実施後]：2015.11.13)

Original Article

The Controversy between Hugo Münsterberg
and John Henry Wigmore in the Early History
of American Forensic Psychology:
Contrasting Professionalism and Public Appeal

SHINOGI Ryo

(Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University)

The purpose of this paper is to explore the controversy between Hugo Münsterberg (1863–1916) and John Henry Wigmore (1863–1943) in late 1900, from the point of view of the contrasting elements of professionalism and public appeal. Münsterberg, a psychologist known as one of the pioneers of "applied psychology," criticized jurists in articles published in a popular magazine and the book. Wigmore, a scholar of criminal law, known for his contributions toward the improvement of the study of evidence, counterattacked Münsterberg. The controversy is often referred to as the opening salvo in the conflict between the different academic disciplines, law and psychology, in the early history of American forensic psychology. It has been often noted that the controversy was caused by Münsterberg's aggressive, exaggerated style as he appealed to the public. The relationship between appealing to the public and the entire controversy has not been fully explained. In order to clarify it, this paper examines the context of the controversy through both the articles Münsterberg published and the personal communication between he and Wigmore. This paper sees the controversy as a collision between the two potentially overlapping disciplines and public appeal.

Key Words : Hugo Münsterberg, John Henry Wigmore, forensic psychology, expert, popularization
RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.33, 15–27, 2016.
